

# Mado 窓



## 神経内科学教授就任及び 神経内科の紹介

平成21年7月1日から神経内科学主任教授を拝命しました望月秀樹と申します。どうぞ宜しくお願いいたします。

私は、今まで高齢者で発病するパーキンソン病の治療及び研究に力を注いできましたので、北里大学でもパーキンソン病に対する最適な治療法を推進し最先端治療の情報を提供することを目指します。また新しい薬剤の開発や最先端治療の臨床応用に取り組み、治験センターなどとも協力してエビデンスのある治療方法を患者さんに提供します。脳外科とタイアップした脳深部刺激療法などの治療法もすでに行っております。また、北里大学東病院には難病病棟があり、進行したパーキンソン病やALSなどの神経変性疾患の治療や介護に力を注いでおります。地域連携も重要視して、在宅看護も少数ですが行っております。パーキンソン病の原因究明を目指した基礎研究も推進しています。相模原には家族性パーキンソン病の患者さんが多く、相模原の風土病といわれています。近年になり、LRRK2という原因遺伝子が判明しました。本疾患の解明や治療法の開発には力を入れなければなりません。本疾患を含む変性疾患、認知症の患者さんに対して、ワクチン療法の開発研究や神経免疫疾患に対する適正治療の開発研究

北里大学神経内科学 望月 秀樹

を推進します。神経疾患のリハビリや器具の開発にも力を注ぎたいと考えております。

年々脳卒中患者が急増しており、社会問題になっています。そのために、脳卒中の医療連携を充実し、相模原の地域医療に貢献したいと考えています。北里大学は救急医療にも力を入れておりますので、脳血管障害も地域医療、消防との連携を進めて、早期発見、早期治療を推奨しtPA等の超急性期医療も推進したいと考えております。また、二次予防にも重点を置きたいと考えております。特に現在は、血管内治療のデバイスの開発が進んでおり、将来的には血管内治療による脳梗塞の予防が必要不可欠と考えています。脳外科の先生との共同で血管内治療認定医を神経内科医でも取得できるシステム作りを推進したいと考えております。

北里大学北里研究所メディカルセンター病院、北里研究所病院においても神経内科学のスタッフが診療にあたっております。今後は、より良い診療のためさらに力を合わせて行きたいと考えています。北里大学神経内科学が発展し、地域医療に少しでも貢献できるように努力したいと考えております。どうぞ宜しくお願いします。

(もちづき ひでき：神経内科学 教授)

## 脳卒中連携パスの運用について



脳血管センター長 倉田 彰

本邦における、高齢化、食生活の欧米化に伴う脳梗塞増加は、先進諸国に共通した問題である。本邦における、寝たきりの最大の原因は脳卒中であり約40%を占め、訪問看護利用者の4割、要介護4.5の最大の原因になっています。脳卒中は、医療費を圧迫する最大の原因でもあり、医療費の1割弱を占め、1兆8,000億円以上と最も多いのが現状です。脳卒中に次ぐ寝たきり、要介護の原因は、大腿骨頸部骨折に代表される整形外科領域の運動器疾患であることを追記します。

2008年4月、上記を踏まえ厚生労働省は、脳卒中・整形外科（大腿骨頸部骨折）患者に対し、急性期早期からの回復期リハの導入により、その転帰を改善すべく、連携パスを診療報酬上点数化しました。保険加算は、急性期病院でこの脳卒中連携パスを運用した場合900点、受け入れ先の回復期病院では運用加算600点、2010年4月の診療報酬改正でも同様の点数加算となっています。この連携パス運用にあたっては、年3回以上の連携パス検討会議が義務づけられています。

2009年2月23日、脳卒中連携パス運用に関した神奈川県全体会議、第1回横浜・川崎脳卒中広域シームレス医療研究会セミナーが、横浜市立大学神経内科教授黒岩先生が中心となり、同大医学部ヘボンホールにて開催されました。この会の目的は、上記の如く、年3回以上の連携パス検討会議が義務づけられていることより、重複しての参加も多いのが現状であり（特に回復期病院は多数の急性期病院と連携している）、1回はこのシームレス会議に参加することで負担が軽減される。もう一点は神奈川県下で出来るだけ共通のパスがあれば、その運用がスムーズにいくという主旨で発足しています。この会で統一パス実行委員会から、パスに盛り込んで欲しい共通事項についての提言がされました。

2009年5月8日、当院においても、北里大学病院第2会議室にて第1回脳卒中地域連携協議会を開催。神奈川県からの提言を盛り込んだ、たたき台である首都圏脳卒中連携パスについて、関連各科で訂正・追加項目等が討議されました。首都圏という名称は当院が、神奈川県とは言え、町田・八王子に近接しており、東京在住の患者さんも多いことからこのような名称にした次第です。

2009年7月24日、同会議室にて第2回脳卒中地域連携協議会を開催。1.脳卒中連携パスの改正点についての確認、2.周辺地域におけるSCU稼動状況と地域連携、急性期、回復期、維持期病院について、この脳卒中連携パスを実際に運用した場合の連携先等についての具体的な話し合いが持たれました。

2009年9月17日、北里大学病院第1、第2会議室にて第3回脳卒中地域連携協議会を開催。首都圏脳卒中連携パス運用の協力を周辺の回復期リハ病院を中心に、維持期病院の方々にお集まりいただきました。まず、4か所（さがみりハビリテーション病院、七沢りハビリテーション

病院脳血管センター、東芝林間病院、鶴巻温泉病院）の回復期病院を連携先として、厚生労働省への申請が無事終了し、2010年2月の病院経営会議でこの首都圏脳卒中連携パス運用が採択され、3月より運用を開始したところ。今後、すでにご了承をいただいている他の回復期リハ施設、近隣である町田の回復期リハ施設含めて、連携先として5か所の追加申請を行ない、5月中に計9か所の申請を完了する予定で動いているところ。今回、日頃から患者さんをご紹介いただいている医師会・医療機関の先生方、訪問看護ステーションの皆様方に、当大学の首都圏脳卒中連携パスについて作成に至った経緯を含めて紹介させていただきました。ご理解とご協力をお願いする次第です。今後ともよろしくお願いたします。

実際の運用方法ですが、当院にご紹介いただき、入院加療となった急性期の脳卒中の患者さんが対象となります。入院時が理想ですが、それがかなわない場合も多々あり、入院後1週間以内に患者・家族にこの連携パス運用について説明し、同意を得ます。特に、回復期リハの早期からの導入が患者の転帰を著しく改善すること、そのために連携先である回復期リハ施設とこのパスを用いることで患者情報の共有が可能になることを説明し、十分な理解と同意を得た後署名をいただきます。首都圏脳卒中連携パスは院内イントラネット（クリティカルパス項、脳パス）よりダウンロードし作成しますが、急性期用・患者様用の2種類がありますのでこの2つを印刷しておきます。署名いただいた急性期用パスは病棟クラークに管理を依頼し、コピーした一部を患者・家族にお渡します。原本は保管し、転院時にこれをコピーし診療録に添付します。原本は他の患者情報とともに転院時に転院先に渡し、この原本を転院先回復期リハ病院・維持期病院が運用していくという流れになります。

患者・家族の同意が得られたら、同時にイントラネットより患者支援センターにアクセスし依頼することで、自動的にこのパスの運用が開始されることとなります。ご紹介いただいた脳卒中急性期の患者さんに関して、ご不明な点は、以下の各担当者にお尋ね下さい。重ねてですが、皆様のご協力よろしくお願いたします。

### 1) 転院調整

患者支援センター部：ソーシャルワーカー：各担当者  
Tel 042-778-8438（直通）

### 2) 事務処理

患者支援センター部担当：中溝  
Tel 042-778-9988（直通） Fax 042-778-9599  
e-mail（中溝）：mizosan@kitasato-u.ac.jp

（くらた あきは：脳神経外科学診療教授・脳血管センター長）

# 北里大学病院骨バンク

組織移植コーディネータ 笠原みどり  
プロセッシング管理者 内田健太郎

北里大学病院骨バンク（Kitasato University Hospital Bone Bank、以下KUBB）は、北里大学病院が開院した1971年に設立され、「安全で良質な移植同種骨の採取、処理、保存、供給」を目指して活動を続けてきました。2006年には日本組織移植学会の認定を受け、日本に二つしか存在しない日本組織移植学会認定の骨バンクになりました。ここでは現在の院内外における北里大学病院骨バンク活動について紹介したいと思います。

骨移植は整形外科領域では古くから行われてきた一般的手術手技です。移植に用いる骨組織は自家骨移植、同種骨移植、人工骨に分けられますがそれぞれに特徴があります。その中で、同種骨移植は自家骨では対応できない腫瘍搔爬後や偽関節手術、人工関節再置換術などによって生じた大きな骨欠損部の修復や再建の際に行われます。同種骨の採取、処理、保存、供給や移植される同種骨の質、安全性を保つために重要な役割を果たしているのが骨バンクです。

KUBBは北里大学医学部整形外科の医師と専任の組織移植コーディネータにより構成され、北里大学病院事務部、診療部、看護部、薬剤部、放射線部や移植医療支援室などの協力のもと活動を行っています。現在、日本臓器移植ネットワーク、組織移植ネットワークと綿密な連携を取りながら近隣4都県（東京都、神奈川県、千葉県、静岡県）で発生する非生体ドナー情報に対応しています。組織移植コーディネータは24時間体制で活動しており、ドナー発生時には情報提供病院での情報収集（感染症の有無や既往歴・合併症等）や、ご家族へのインフォームドコンセントなどを行っています。ご家族からの同意が得られるとドナーからの骨採取を行います。骨採取は北里大学医学部整形外科から派遣した医師3名と組織移植コーディネータで行います。

採取後、採取組織に対する一般細菌培養検査、ド

ナーのウイルス検査及び細菌培養検査を厳密に行うことで同種移植骨の安全性を確保しています。検査の結果、安全性が確認された同種骨は移植に適した形状にKUBBプロセッシングルームで加工した後、加温処理によって殺菌処理します。2008年、厚生労働省組織バンク設備整備事業の支援を受け、骨バンクの施設改修と整備が行われました。その結果、細胞も扱える極めてクリーン度の高い環境下（空気清浄度クラス100および10,000）での同種骨の形状加工、加温処理が可能となりました。このことによってこれまで以上に安全で良質な同種骨を提供することが可能になりました。

北里大学病院では、2007年に「非生体ドナーによる凍結保存同種骨・靭帯組織」移植が先進医療として認可されました。2007年から現在までに同種骨移植手術を必要とする多くの患者さまが北里大学病院で先進医療を受けています。KUBBは北里大学病院だけでなく、他施設への同種骨供給も行っています。北海道など遠隔病院への同種骨の供給も行っており、東日本における拠点骨バンクとしての役割も果たしています。先進医療や同種骨移植についてご不明な点はKUBB（kubb@kitasato-u.ac.jp）にお問い合わせください。

今後もより一層、拠点バンク骨バンクとしての体制を整備することで、多くの施設に良質で安全な同種骨を供給できるような体制を作っていきたいと考えております。今後とも何卒よろしく願いいたします。

（かさはら みどり：看護部移植医療支援室）

（うちだ けんたろう：医学部整形外科学）

## 患者支援センター部 スタッフ紹介



後列左から／鈴木、小俣 前列左から／中溝、柳島

日頃より、当センターの病診連携業務にはいつもご協力をいただきありがとうございます。迅速な対応を心掛けておりますが直ぐに対応できない事もあり、この場をお借りしてお詫び申し上げます。

さて、今回は当センターで事務を担当している4名の紹介をさせていただきます。まず、病診連携業務に係わっているスタッフでは柳島 志津夫・小俣 奈緒美の2名で、患者事前予約（内科のみ）や検査サービスの手続きと情報提供書等の内容確認及び送付業務を担当させていただいております。介護保険主治医意見書の作成依頼と発送等の管理は、鈴木 典子が担当しております。最後になりますが、総合的な調整担当としては、中溝 一男が担当させていただいております。今後共ご指導・ご鞭撻の程重ねてお願い申し上げます。

## 検査サービスのご案内

当センターでは、以前より病診連携サービスの一環としてCT検査・核医学検査・生理検査の事前予約サービス「検査サービス」を実施しております。「検査サービス」は、早めに検査を実施することと迅速なレポートの報告に対応していますので、是非ご利用をお願い申し上げます。

検査サービスのご依頼・お問い合わせは  
下記までお願いします



〒252-0375 神奈川県相模原市南区北里1-15-1  
北里大学病院 患者支援センター部  
TEL 042-778-9988 FAX 042-778-9599  
<http://www.khp.kitasato-u.ac.jp/>  
E-mail / [shoukaiw@kitasato-u.ac.jp](mailto:shoukaiw@kitasato-u.ac.jp)